

研究ノート

# メディアにおける先住民と スーダン難民の描写に関する考察

——アデレードを事例に——

栗田 梨津子

## Studies in the Description of Indigenous and Sudanese Peoples in the Australian Media : The Case of Adelaide

Ritsuko KURITA

**Abstract** : This study analyses the description of Indigenous and Sudanese peoples residing in Adelaide in the national newspaper, ‘The Australian’ and the local paper in Adelaide, ‘The Advertiser’ from 2003 to 2012. Despite the differences in their attributes, both groups were dichotomised either as ‘good’ or ‘evil’ and the complex actual situations surrounding them were ignored in the newspaper articles.

Meanwhile, both groups were depicted differently with regard to Australia’s image as a humanitarian and tolerant nation. Admiring the activities of church groups as assistance providers and the Sudanese refugees as receivers of such assistance strengthened such an image. In contrast, the Indigenous people were depicted as portraying social injustice ; thus they were less agreeable to the Australian public and media.

In the newspaper articles, both groups were evaluated by Anglo-Australians based on the extent of their contribution to the construction or maintenance of Australia’s image as well as the degree of the integration of both groups into society. Consequently, it can be said that both are in competition not only for material but also for the symbolic resources of a good reputation in the mainstream society.

### 1. はじめに

本稿では、アデレードに居住する先住民とスーダン難民のメディアにおける描写について考察する。先住民とスーダン難民に着目した背景には、ポスト多文化主義の時代における民族間関係をめぐる次のような問題がある。

オーストラリアは2000年以来、人道的支援プログラムの下でアフリカからの難民を本格的に受け入れ、2002年から2006年にかけて、同プログラムにおける難民の出身国の第一位はスーダンであった（Jupp 2007 : 182 ; Department of Immigration and Citizenship

2012 : 13)。2007年に移民大臣がアフリカからの難民の受け入れ人数の削減を発表して以来、新たに渡豪するスーダン難民の数は減少した。しかし、故郷に戻らず、オーストラリアに留まることを選択したスーダン難民とその子孫は、オーストラリア全土にコミュニティを形成し<sup>1)</sup>、多文化社会を構成する一集団としての位置を占めている。

スーダン難民のオーストラリア社会への「統合 (integration)」<sup>2)</sup>に関する研究では、スーダン難民の多くが主流社会への適応を望む一方で、現実には教育や雇用の場で差別を受けるなど社会から排除されていること、特に英語力の低さや主流社会のコミュニティとの社会関係の乏しさなどが社会適応を阻む要因となっ

ていることが明らかにされている (Lino Lejukole 2008 ; Marlowe 2013 ; Poppitt and Frey 2007)。スーダン難民が経験するこれらの困難は、同様に貧困や差別によって社会から排除されてきた先住民の経験とも類似しているが、両集団の間では住宅、雇用、福祉サービス等の政府からの物質的資源をめぐる緊張関係が生じていることも報告されている (Colic-Peisker and Tilbury 2008)。

一方で、筆者が2008年より継続的に調査を行っているアデレードでは、一部の先住民とスーダン難民の間に対立も見られるが、同時に両集団間には友好的な関係が築かれるケースも散見される。その背景には、主流社会からの排除という共通の経験を媒介とした連帯が生じていることも推測される。そこで本稿では、政府統計および現地調査のデータ<sup>3)</sup>を基にアデレードに居住する両集団の社会経済的状況を踏まえながら、主に2003年から2012年までのオーストラリアの全国紙全国紙「オーストラリアン (The Australian)」およびアデレードの地方紙「アドバタイザー (The Advertiser)」における両集団に関する主な記事を分析し、両集団の表象の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

## 2. 両集団を取り巻く社会経済的状況

### 2-1. スーダン難民について

2011年の時点でオーストラリアには約22,000人のスーダン難民が定住しているが (Australian Bureau of Statistics 2011)、そのうち南オーストラリア州に居住するスーダン人の数は約2,000人である。スーダン難民は、オーストラリア到着後、半年間は難民支援組織などから生活に必要な支援を得ることができるが、それ以降は、社会福祉団体等が提供する難民支援サービスを利用しながら、民間部門の住宅を探し、経済的にも自立することが求められる (Lino Lejukole 2008 : 139-140)。しかしながら、スーダン難民の多くは雇用、住宅などあらゆる面で不利な状況に置かれている。とりわけ雇用に関しては、大半のスーダン難民が無職か低賃金労働を余儀なくされている。

2013年の時点で、南オーストラリア州におけるアフリカ系出自の人々のうち、スーダンをはじめとする北アフリカ出身者の失業率は約16パーセントであり、州全体の7.1パーセントを大幅に上回っていた (SALT African Australian News Magazine 2013)。失業率の高さの原因としては、教育レベルの問題や母国で

取得した資格が承認されないなどの制度的な問題に加え、背の高さといった身体的な特徴や服装を理由とした人種差別、さらに「アフリカ人は機械の扱い方を知らない」など雇用者がアフリカ出身者に対して抱くステレオタイプが挙げられている (Atem 2008)。

また、業種については、製造業や医療・社会扶助関係の仕事に就く人の割合が相対的に高く、専門職に就く人は非常に限られている。たとえば、2010年に難民としてオーストラリアへ移住したスーダン人女性は、アデレードの大学で商学の学士号を取得した後も就職先が見つからず、現在は社会福祉金で生活している。この女性は、会計士の仕事を探しているが、オーストラリアでは家族経営の会社が大半であり、コネクションがないために就職が困難であると語ってくれた<sup>4)</sup>。このような就職の困難さを反映し、アデレードにおけるスーダン人の1週間当たりの平均的な個人所得は、1ドルから199ドル、200から299ドルの層が最も多く、全体の約30%を占めていた。オーストラリア人の場合、400ドルから599ドル、600ドルから799ドルの層が約20パーセントを占めていることから、かなり低いことがわかる (Australian Bureau of Statistics 2011)。

雇用が不安定であり、低所得であることは、住宅の入手の困難さへと直結する。南オーストラリア州では、スーダン難民の大半が民間の賃貸住宅に居住しているが、住宅探しの際に、彼らはオーストラリアへ来て間もないこと、無職であること、英語力が低く、家族の人数が相対的に多いことなどが不利にはたらくことが指摘されている。また、スーダン難民が住宅探しにおいて様々な困難に直面しているにもかかわらず、スーダン難民を対象とした公営住宅の確保などの措置はとられていない (Lino Lejukole 2008 : 140-141 ; Lino Lejukole 2013 : 117-118)。

### 2-2. 先住民について

先住民は、太古からオーストラリア大陸に歴史を刻んできた存在として、白人の入植に伴う様々な歴史的不正について政府にその責任を問い、先住民としての独自の権利を主張できるという点で、難民とは基本的に立場が異なる。一方で、主流社会からの差別や貧困を経験し、社会経済的に最下層に置かれているという点では難民と類似の状況にあるといえる。特に、1990年代以降、オーストラリアではそれまでの先住民に対する社会福祉政策の行き過ぎが見直され、市場経済への包摂をはじめとする先住民の「主流化」の動きが顕

著であり、こうした政策の後退は人々の社会経済的状況にも影響を与えている。

2011年の政府統計によると、南オーストラリアに居住する先住民の人口は約30,000人であり、そのうち15歳以上の先住民の失業率は約15パーセントで、非先住民の失業率、約5パーセントの約3倍にあたる。特に、若者の就職難は深刻である。たとえば、アデレードに居住する20代のある先住民女性は、数年間に専門学校卒業後、福祉関係の仕事を探しているが、運転免許証を有していない等の理由で就職できず、社会福祉金で生活している。彼女は最近では販売員などにも職種を広げ、昨年の1年間で25件の求人に応募したが、面接に呼ばれたのは2件であり、いずれも雇用にはつながらなかった<sup>5)</sup>。こうした状況を反映し、アデレードの先住民の1週間あたりの個人所得については、200ドルから299ドル、300ドルから399ドルの割合が約18パーセントであり最も高かった。業種に関しては、医療・社会扶助や行政関係の割合が最も高いが、これは1990年代以降、先住民の市場経済への参入を促すために、政府によってこの分野における先住民の雇用が創出されたためである。

住宅に関しては、南オーストラリアにおける先住民世帯のうち、賃貸住宅に居住する世帯は約56パーセントに上る。そして賃貸住宅に居住する先住民世帯のうち、民間の不動産業者から家を借りている世帯の割合は約32パーセントであり、一方で、州政府の住宅信託から住宅を借りている先住民世帯は19パーセントであった(Australian Bureau of Statistics 2011)。このことから、これまで先住民は「大家族で生活している」等の理由により民間の不動産業者が提供する住宅への入居が断られるケースが多いとされていたが<sup>6)</sup>、この傾向は変化しつつあるといえる。また、スーダン難民の場合と異なる点は、難民のみを対象とした公営住宅は存在しないのに対し、先住民のみを対象とした公営住宅は確保されていることから<sup>7)</sup>、先住民はスーダン難民よりも手頃な住宅を入手できる可能性が相対的に高いといえる。

### 3. メディアにおけるスーダン難民 および先住民の描写

#### 3-1. スーダン難民の描写

2003年以降の全国紙および地方紙におけるスーダン難民に関する主な記事約40件のうち、(1)暴力事件や犯罪に関するものが15件、(2)主流社会の人々

によるスーダン難民の擁護と支援の提供に関するものが13件、(3)スーダン難民による支援への感謝および社会貢献に関するものが9件であった。「オーストラリアン」においてスーダン難民は、概して社会への適応が困難な人々として描かれる傾向がある。たとえば、同紙では、メルボルンにおけるスーダン難民と他のエスニック集団間の衝突が頻繁に取り上げられ、定職に就かないアフリカ難民の若者が、退屈から逃れるために酒や薬物に溺れ、暴力や犯罪に関与していること、そして彼らが主流社会からの疎外感を覚え、保護や帰属意識を求めてエスニック集団を形成し、テリトリーをめぐる他のエスニック集団と対立していることなどが報じられている(*The Australian* 26 December 2006; 5 April 2013)。

「アドバタイザー」でも、スーダン難民による犯罪や暴力事件が頻繁に取り上げられ、その犯罪件数は16ヶ月で450件(うち逮捕が258件)とされ、逮捕率は州全人口の2倍にあると報じられた(*The Advertiser* 14 November 2008)。特に、2008年11月にアデレード市街地中心部でナイフを持ったスーダン人の若者グループが暴力事件を起こし、14歳のスーダン人の少年が殺害されたのを機に、スーダン難民による暴力事件に一般市民が巻き込まれるのではないかとの懸念の聲が掲載されるようになる(*The Advertiser* 6, October 2010; 9 October 2010)。全国紙と同様に、スーダン難民の若者による暴力行為・殺人事件が起こる度に、彼らは「ギャング」として一括され、恐怖心をもたず、武器を携帯して放浪する近寄りたがたい存在として描写された。また、こうした暴力行為の原因が、母国での長年にわたる内戦や難民キャンプでの生活に由来するトラウマやストレス障害によるものであるとして説明された(*The Advertiser* 14 November 2008)。

スーダン人の逮捕件数の異常な高さについて、その背後には主流社会におけるスーダン難民に対する偏見や差別の問題が潜んでいることが推測される。たとえば、警察に弟を逮捕されたスーダン人女性は、弟の逮捕時の状況について次のように語ってくれた。

「彼は友達とシティにいました。警察がシティで彼を逮捕したとき、そこには別のアフリカ人男性が2人いました。彼らは人々を恐れさせるような行為をしていて、誰かが警察に通報し、警察は偶然周辺にいた2人のアフリカ人(その一人が彼女の弟)を逮捕し、彼らを投獄しました。何の証拠も、目撃者もないにもかかわらずです。警察

は、シティを歩いているアフリカ人かスーダン人男性を片っ端から捕まえていったのです。警察は彼らに何が起こったのか、話もさせずに彼らを攻撃し始め、彼らを殴り始めたのです。警察に通報した子供がそこにいました。ただ肌が黒いというだけで暴力的な人とみなされたのです。』<sup>8)</sup>

メディアでは、このような暴力や犯罪の背後にある様々な社会的不正が語られることはなく、犯罪に関与したとされる個人や集団を白人が管理できない異端な存在として他者化された。

一方、「アドバタイザー」では、犯罪や暴力事件と同程度に、スーダン難民が置かれた状況に対して同情を示し、彼らを擁護・支援しようとする教会関係者やコミュニティ・グループの様々な取り組みも取り上げられた (*The Advertiser* 22 January 2007; 29 December 2008; 9 June 2008)。特に、アデレードの多くの教会が、スーダン難民の家族のスポンサーとなり、親族呼び寄せのための資金集めや援助をしていることが報じられ、そのような記事には、以下のような教会の人々に対して好意的な態度を示すスーダン難民の声が組み込まれた。

「小さなジョージア、アドック、ファティマは、毎週日曜に彼らの周りで起こっている奇跡にまだ気づいていない。彼らは州の中で最も多文化的な教会であるフェリデンパーク教会の一員である。教会の3分の1がアボリジニ、3分の1が白人、残りの3分の1がスーダン人だ。日曜は、移民と難民の日で、フェリデンパーク教会はコミュニティで困っている人を支援するよう人々に呼びかけている。アドック・ガブリエルの母、モニカ・アブックは、3年間にアドックと彼女の4人の兄弟と姉妹と共にオーストラリアへやって来た。アドックの父親はエチオピアの難民キャンプでビザの許可を待っている間に亡くなった。アドックはこの教会について「この人々はとても親切です。ここは訪ねるのに良い場所です。」と語っていた。」

(*The Advertiser* 25 August 2003)

筆者は2015年と2016年に二度、この教会を訪ねたが、いずれも参拝者は30人程度で先住民が数人、アフリカ人が1人で、それ以外は白人であった。この教会で牧師のアシスタントをしているリベリア難民の女

性によると、現在教会では難民のための資金集めはしておらず、彼女自身、英語が障壁となり、清掃婦としての仕事を見つけるまでに苦労をしたが、特に教会の人から助けたもらった経験はないと語ってくれた<sup>9)</sup>。

上記の記事以外にも、「アドバタイザー」では、白人コミュニティからの支援に謝意を示すスーダン人の声や (*The Advertiser* 14 October 2006; 4 September 2003)、大学進学や就職を通してオーストラリア社会で成功を収めるスーダン人、地方町におけるアフリカ人と先住民の緊張緩和のために、自警団の活動に協力するスーダン人が紹介され (*The Advertiser* 7 January 2012)、これらの人々は内戦や難民キャンプでの過酷な経験にもかかわらず、新しい社会へ適応しようと努力する人々として肯定的に描かれた。

以上から、全国紙と地方紙では、双方ともスーダン難民が容易に暴力性と結び付けられ、主流社会の規範から逸脱した「邪悪な」集団か、或いは苦難やトラウマを経験しながらも、支援を提供するオーストラリア人に謝意を示し、何らかの形で返礼しようとする「善良な」人々というカテゴリーへと二分される傾向があり、そのような評価の二分化によって、主流社会におけるスーダン難民への眼差しが過度に単純化されているといえる。

### 3.2. 先住民の描写

メディアにおいて先住民は長年、暴力や殺人などの犯罪に結び付けられてきたが、この傾向は現在も大きく変化していない。2003年以降の全国紙および地方紙における先住民に関する主要な記事約40件のうち、(1)暴力や犯罪に関するものは約25件と最も高く、(2)教育やスポーツなどの分野で成功を収めた先住民に関するものが7件、(3)人種差別や福祉への依存など先住民をめぐる諸問題に関する記事が6件であった。

「オーストラリアン」と「アドバタイザー」では、特に2005年から2010年にかけて、アデレードの先住民の若者による犯罪に関する記事が連続して掲載された。その典型的な例として、主に10代のアボリジニの少年からなる犯罪グループ、「ギャングオブ49 (Gang of 49)」に関する記事が挙げられる。「ギャングオブ49」とはメディアによって考案された呼称であり、アデレード全域で凶器を使った強盗、窃盗、危険なカーチェイスなど様々な違法行為を繰り返し、市民の安全を脅かす存在として描写された。「ギャングオブ49」の存在がマスメディアによって本格的に取

り上げられて以来、アデレードで起こる犯罪の多くがこの集団と結び付けられ、2005年9月から2006年6月の9ヶ月間に「ギャングオブ49」の逮捕件数は269件に及んだと報じられた (*The Advertiser* 10 January 2007)。

たとえば、「アドタイザー」に2007年9月25日付で掲載された記事では、盗難車で衝突事故を起こした17歳のアボリジニの少年が自動的に「ギャングオブ49」の一員とされ、事故の原因が彼の家庭環境の悪さやIQの低さと結び付けられたのである (*The Advertiser* 25 September 2007)。「ギャングオブ49」のメンバーには、少数ながら非アボリジニも含まれていたが、テレビの報道や新聞で取り上げられる犯罪は必ずアボリジニの少年によるものであった。

このような報道に対し、先住民コミュニティの長老は、アボリジニ・コミュニティ内に組織化されたアボリジニのギャングは存在しないと主張した (*The Advertiser* 27 February 2007)。それにもかかわらず、メディアでは「ギャングオブ49」があたかも先住民の犯罪組織であるかのように報じられた。たとえば、「私達の郊外を恐怖に陥れるギャングの内部」と題された記事では、「ギャングオブ49」の構造について、ギャングは24人の「主犯格」と25人の「副主犯格」から成り、彼らは親族関係や友人関係にあるとされたのである (*The Advertiser* 10 January 2007)。

これまで先住民の若者が先住民であることを理由に不当に逮捕されるケースは他州でも報告されてきたが (eg. Cowlishaw 2004: 48-49)、先住民の若者を「ギャング」として一括し、逮捕する背景には、警察の先住民に対する偏見や人種差別が存在することが考えられる。たとえば、甥を逮捕されたある先住民の女性は、逮捕の様子について次のように語った。

「甥は、幼馴染のアボリジニの友人らとアデレード市内中心部の繁華街に遊びに出かけていました。ところが、繁華街で友人と他の少年グループがけんかを始め、そこに警察がやって来ました。甥は、けんかを止めようともみ合いの中に入ると、真っ先に警察に捕まえられかけたため、警察に抵抗しました。するとまさに警察に抵抗したという理由で、彼は他の友人らと共に逮捕されてしまいました。甥が真っ先に捕まえられたのは、他の友人よりも彼の膚の色が黒いせいです。」<sup>10)</sup>

このように、先住民らしい外見をしていることが逮

捕につながりやすく、若者の高い逮捕率の要因となっていることが考えられるが、こうした社会的不正について報じられることはなかった。

「ギャングオブ49」をはじめとする先住民による犯罪やそれを批判する記事が相次ぐ中で、歴史的背景などを考慮した上で先住民に同情を示し、彼らを擁護する見解も一部掲載されたが (*The Advertiser* 20 March 2009)、それよりも、先住民の若者の更生のために多額の税金が費やされているなど、白人を先住民による度重なる犯罪の「被害者」とみなす意見の方が多く取り上げられた (*The Advertiser* 6 October 2009; 11 March 2009)。

一方で、「ギャングオブ49」をめぐる一連の出来事をめぐる先住民コミュニティからの批判の声が取り上げられることもあった。たとえば、南オーストラリア州法務長官が「ギャングオブ49」を更生の見込みのない純粋な悪 (pure evil) と呼んだことに対し (*The Australian* 13 October 2009)、先住民の以下のようなコメントが掲載された。

「私達は歴史を通して純粋な悪の多くの例を経験し、純粋な悪の多くは、この国の入植という名においてアボリジニの人々に対して実行されました。そのような種類の言葉を使うことは間違っていると私は思います。私の観点からすると、私達は純粋な悪の最後部にいます。」

(*The Advertiser* 19 October 2009)

さらに、先住民の若者に関する問題を担当する社会包摂委員会の委員長も「ギャングオブ49」に対して同様の発言をしたことに対し、「ギャングオブ49」のメンバーとされた子供の祖母による以下のコメントが掲載された。

「私達は、子供達が社会に適応すべきだということはわかっています。もし子供達に教育を受ける機会があれば、物を盗んだり、罪を犯したりしないでしょ。 (中略) 私達の文化は過去200年で非常に弱められたため、私達の子供達は尊敬が何かを知りません。白人の法によると、この土地は奪われたということが私達の心の中に刻み込まれています。なぜ私達は白人の財産法を尊重しなければならないのでしょうか。委員長は、アボリジニに対する政府のサービスが不十分であることに目を向けるべきです。」

(*The Advertiser* 27 February 2007)

これらの先住民のコメントは、「ギャングオブ49」による犯罪の根底には、白人との歴史における不正やその結果として現在生じている先住民をめぐる様々な社会問題があることを暴き出すものであるといえる。

2010年に南オーストラリア州警察が「ギャングオブ49」のようなアボリジニの犯罪組織が存在するという証拠はないことを正式に発表し、事態は鎮静化した。結局、「ギャングオブ49」はメディアが創り出した想像上の敵に過ぎず、それは白人オーストラリア人が先住民に対して潜在的に抱く野蛮性や暴力性のイメージとそれに対する恐れを象徴するものであったといえる。

一方で、「アドバタイザー」では、相対的に件数は少ないものの、主流社会の中で成功を取めた「善良な」先住民についても紹介された。ここで「善良な」先住民には、TAFEや大学進学のための奨学金を獲得した先住民(*The Advertiser* 11 September 2006)、次世代の先住民や主流社会の人々に伝統文化を継承する先住民(*The Advertiser* 3 April 2012)などが含まれた。彼らは、勤勉さをはじめとする白人の規範に従う人々であり、教育などにおける非先住民との格差是正政策や、先住民文化を国民的遺産として賞賛する先住民政策の成果を強調するのに都合の良い存在であったともいえる。

以上から、メディアにおいて先住民は、スーダン難民の場合と同様に、主流社会の安全を脅かす「邪悪な」存在か、或いは主流社会へ適応した「善良な」先住民のいずれかとして描かれているといえる。「邪悪な」先住民に関する記事では、先住民による度重なる犯罪の「犠牲者」としての白人のイメージが強調された。さらに留意すべき点は、先住民をめぐる諸問題を解決するための政府の取り組みに対し先住民の側は謝意を示すどころか、むしろそれらの問題の根底にある歴史的・社会的不正を暴き出す存在として描かれている点である。

#### 4. 考 察

新聞記事におけるスーダン難民および先住民の描写を比較すると以下の点が明らかになってくる。類似点として、双方の集団は、社会規範に従わない「邪悪な人々」或いは社会規範に従うと同時に、白人からの支援に謝意を示す「善良な人々」という二分法に基づい

て範疇化され、現実のスーダン難民或いは先住民はそのどちらかでしかありえないという形で両集団のあり方が規定されていることが指摘できる。いずれの集団も「邪悪な人々」は「ギャング」とほぼ同一視され、個人による犯罪を集団による組織化された犯罪行為と結び付けようとする姿勢が顕著である。

さらに、両集団のメンバーによる暴力や犯罪は社会への適応を果たせなかった個人或いは集団の責任とみなされ、その背後にあると思われる貧困の問題や両集団に対する主流社会からの偏見や差別などの問題について語られることは殆どなかった。このようにして、社会的脅威をもたらす「加害者」としての先住民或いはスーダン難民対その「犠牲者」としてのオーストラリア市民という図式がつくられるのである。一方で、両集団の「善良な人々」に関する記事において、西洋の教育制度で成功を収め、社会貢献を図ろうと努力する人々のストーリーは、そのような成功を可能にした国家政策やオーストラリア人の寛大さを強調するのに好都合であり、そこには文化的差異に寛容で、人道主義的なオーストラリアのイメージに沿ったストーリーを構築しようとするメディアの思惑が窺える。

さらに、オーストラリアが理想とする自己イメージの維持という観点から、両集団に関する記事のストーリーには若干の相違点も確認できる。スーダン難民の記事におけるキリスト教関係者をはじめとする主流社会の白人住民によるスーダン難民の支援とそれに感謝するスーダン難民という語りの図式は、オーストラリアが国際社会に対して提示している人道主義的な国家としてのイメージの維持・強化に寄与するものあり、オーストラリア市民にとって心地よい内容であった。それに対し、先住民に関する記事では、先住民の若者に見られる反社会的行為の要因を、白人との歴史や政府のサービスの不足へと結びつける先住民のコメントが掲載されるなど、そこでは主流社会からの社会福祉サービスの恩恵を受けながらも、それに対し謝意を示さない先住民の姿が強調された。さらに、現在先住民が直面する様々な問題の背後にある歴史的不正や主流社会におけるレイシズムの存在を暴き出す先住民のコメントは、オーストラリアの理想的な自己イメージとは相反するものであり、市民にとっては不都合なものであったといえる。

#### 5. 小 括

以上、メディアにおけるアデレードのスーダン難民

と先住民の描写を比較し、その特徴を分析してきた。両集団は、先住民と難民という異なる属性を有するにもかかわらず、その描写のされ方は類似していた。すなわち、主流社会の規範に従う「善良な人々」或いは社会から逸脱した「邪悪な人々」として二分化して評価され、両集団の人々が置かれた現実の多様で複雑な状況が語られることはなかったのである。

ここで留意すべき点は、両集団を「邪悪な」人々或いは「善良な」人々に振り分ける際にはたらく白人の権力、すなわち白人性の問題である。ハージは、ホワイト・マルチカルチュラルリズムにおいて、エスニック集団が白人オーストラリア人の利益や豊かさへの貢献の度合いによって評価される客体として固定化されると述べたが（ハージ 2003）、本稿で取り上げたメディアにおいて、両集団は白人による評価の対象とされ、主流社会への「適応」の度合いに加え、寛容さや人道主義を強調するオーストラリアの自己イメージの維持や強化への貢献度によって評価された。このことから、両集団は主流社会からの評判という象徴的資源をめぐって互いに競合関係にあるといえ、今後はこのような競合関係が両集団間の民族関係に及ぼす影響について考察していきたい。

#### 謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金「オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究」（若手研究 B、課題番号 26770300）によって実現したものである。

#### 注

- 1) 2006年の国勢調査によると、スーダン難民はオーストラリアの全州に居住しているが、その割合が相対的に高い州として、ビクトリア州(6,210人)、ニューサウスウェールズ州(5,975人)、クィーンズランド州(2,401人)が挙げられる(Department of Immigration and Citizenship 2014)。
- 2) 移民の文化適応に関する研究において、「統合(integration)」とは一般的に、移民が独自の文化を維持しながら、主流社会の異なる背景をもつ人々と相互接触し、市民社会へより広く参加することを意味する。しかし一方で、その具体的な意味はそれを使用する人によって異なることが指摘されている。たとえば、「統合」は、政府、機関、組織が社会における人々を範疇化し、統制する手段とみなされ、人々に否応なく画一性を押し付けるものとして捉えられることもあれば、移民に独自の文化を放棄し、主流社会の文化や価値観を受け入れることを強要する「同化」と同義に捉えられることもある(Lino Lejukole 2008: 23-24; Marlowe 2013: 101-102; Fozdar 2012: 49)。
- 3) 筆者は、2008年以降、アデレード北西部郊外の先住民コミュニティでの現地調査を行ってきたが、2013年以降は同地域に居住するスーダン難民にも調査対象を広げ、先住民との民族間関係についての断続的な調査を行っている。本稿では、その際に得られたデータに基づいている。
- 4) 2015年9月16日の聞き取り調査より
- 5) 2016年9月7日の聞き取り調査より
- 6) 2008年8月12日、南オーストラリア州職員への聞き取り調査より
- 7) 2014年の時点で、南オーストラリア州には39,024戸の公営住宅があるが、それに加え、先住民を対象とした公営住宅が1,788戸確保されている(Department for Communities and Social Inclusion 2014)。
- 8) 2015年9月18日の聞き取り調査より
- 9) 2015年9月20日の聞き取り調査より
- 10) 2009年11月20日の聞き取り調査より

#### 参考文献

- Atem, P. G. (2008) An investigation of the challenges facing African refugee communities in the Australian workforce: Findings from a qualitative study of Sudanese and Liberian refugees in South Australia (<https://www.tasa.org.au/wp-content/uploads/2008/12/Atem-Paul.pdf>)
- Australian Bureau of Statistics (2011) 2076.0 -Census of Population and Housing: Characteristics of Aboriginal and Torres Strait Islander Australians.
- Colic-Peisker, V. and Tilbury, F. (2008) Being Black in Australia: A Case Study of Intergroup Relations. *Race & Class* 49 (4) 38-56.
- Cowlshaw, G. (2004) *Blackfellas, Whitefellas and the Hidden Injuries of Race*, Blackwell Publishing.
- Department for Communities and Social Inclusion (2014) *South Australian Housing Trust Annual Report 2013-2014* ([http://dcsi.sa.gov.au/\\_\\_data/assets/pdf\\_file/0004/20794/SAHT-Annual-Report-Final-2013-14-.pdf](http://dcsi.sa.gov.au/__data/assets/pdf_file/0004/20794/SAHT-Annual-Report-Final-2013-14-.pdf))
- Department of Immigration and Citizenship (2012) *Australia's Humanitarian Program 2013-2014 and beyond*.
- . (2014) *Community Information Summary: Sudan Born* ([https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02\\_2014/sudan.pdf](https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02_2014/sudan.pdf))
- Fozdar F. (2012) Beyond the Rhetoric of Inclusion: Our Responsibility to Refugees. In Hayes, A. and Mason, R. (eds.) *Culture in Refuge: Seeking Sanctuary in Modern Australia*, Ashgate, pp.49-64.
- Jupp, J. (2007) *From White Australia to Woomera: the Story of Australian Immigration*, Cambridge University Press.
- Lino Lejukole, J (2008) "We Will Do it Our Own Ways": a Perspective of Southern Sudanese Refugees Resettlement Experiences in Australian Society (PhD Thesis), University of Adelaide.
- . (2013) Falling Through the Cracks: Southern Sudanese Refugees' Experiences of Housing and Accommodation Shortage in South Australia. In Marlow, J, Harris, A. and

- Lyons, T. (eds.) *South Sudanese Diaspora in Australia and New Zealand: Reconciling the Past with the Present*, Cambridge Scholars Publishing, pp.116-127.
- Marlow, J. (2013) South Sudanese Resettlement: Acculturation Strategies and Social Capital. In Marlow, J, Harris, A. and Lyons, T. (eds.) *South Sudanese Diaspora in Australia and New Zealand: Reconciling the Past with the Present*, Cambridge Scholars Publishing, pp.101-115.
- Poppitt, G. and Frey, R. (2007) Sudanese Adolescent Refugees: Acculturation and Acculturative Stress. *Australian Journal of Guidance & Counselling* 17(2), 160-181.
- SALT African Australian News Magazine (2013) 'Unemployment Issues for African Australians in South Australia' (<http://www.saltmagazine.org/unemployment-issues-for-african-australians-in-south-australia/>)
- ハージ・ガッサン (2003) 『ホワイト・ネイション - ナショナリズム批判』 保莉実・塩原良和訳, 平凡社  
〈スーダン難民に関する記事〉
- The Australian*. 26 December 2006 'Warning on African refugee gangs'
- . 28 September 2007 'Sudanese migrants "fighting islanders"'
- . 5 April 2013 'Refugees' new lives 'wasted by tragedy'
- The Advertiser*. 25 August 2003 'Giving all new arrivals a safe place to call home'
- . 4 September 2003 'So safe—a world away from horrors of their homeland'
- . 14 October 2006 'Home safe and rebuilding a life'
- . 22 January 2007 'Helping refugees achieve goals'
- . 9 June 2008 'Cash to help refugees embrace a better life'
- . 14 November 2008 'Strain on our families is incredible'
- . 29 December 2008 'Cultures combine in friendship'
- . 6 October 2010 'Send them home'
- . 9 October 2010 'Not our fight'
- . 7 January 2012 'Refugee bridges racial gap Neighbourly way to unity  
〈先住民に関する記事〉
- The Australian* 13 October 2009 'Indigenous kids better off in jail: South Australian A-G Michael Atkinson'
- The Advertiser* 11 September 2006 'Aboriginal students: step closer to dream'
- . 10 January 2007 'Inside the gang terrorising our suburbs; DEATH, THEFT, RAIDS'
- . 27 February 2007 'Cappo starts talks on the Gang of 49'
- . 25 September 2007 'Death-chase youth faces life'
- . 11 March 2009 'Column: dark side of justice'
- . 20 March 2009 'Decades of shame'
- . 6 October 2009 'News Opinion'
- . 19 October 2009 'COMMITMENT Solving crisis will take the whole community How I would with the Gang deal of 49'
- . 9 April 2010 'Opinion Edition 1'
- . 3 April 2012 'Call to teach Kaurna at every city school'